

## 防災歳時記 (2)

# —雪迎え—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

### 小春日和

この夏の酷暑に悩まされてきた人々には、さわやかな秋の訪れに限りない喜びを感じる。秋の盛りもいつの間にか過ぎると、朝夕はめっきり寒くなる。

そろそろコートもほしくなるころ、太陽の光がそそぐポカポカした暖かさに心も軽くなる。まさに小春日和一芝生の上でのゴロリなんて最高によい。

小春とは、旧暦10月のことで、いまの暦では11月から12月初めにかけてを言う。だから、小春日和とは晩秋から初冬にかけての、のどかでぼかぼかした暖かな天気のことである。

小春という字につられて「春の初めのよい天気」などと答えると、入社試験などでは落第だ。

### 雪迎え

山形県米沢盆地の赤湯(南陽市)の白竜湖周辺では、小春日和の快晴無風の日に、小さくもが糸を引いて空を飛ぶ風景が見られ



写真1 JR赤湯駅の観光ポスター



写真2 南陽市の白竜湖周辺

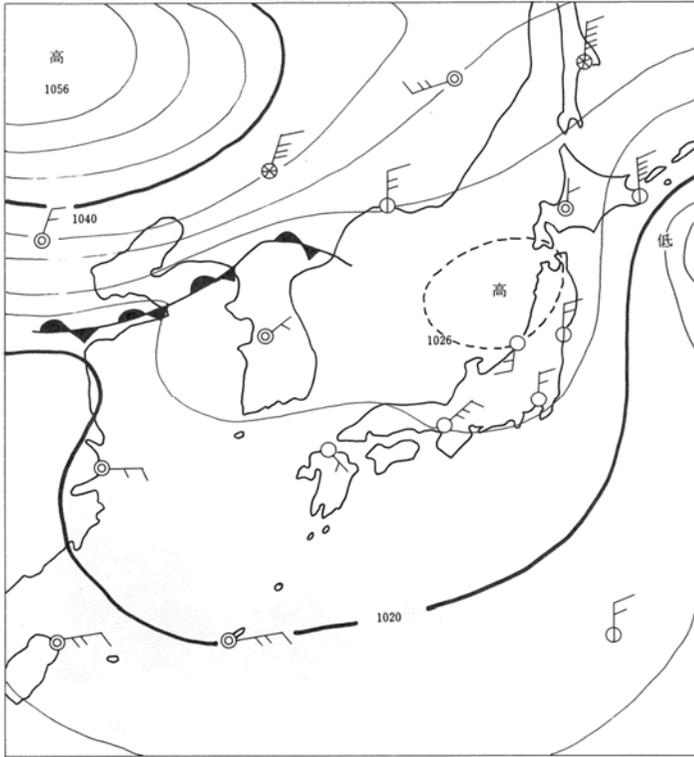


図1 雪迎えの飛んだ日 (1993年11月16日9時：小春日和)

る。雲ではなく、虫の蜘蛛である。凍った澄んだ空に、銀色の糸がキラキラと光ったかと思うと、たちまち見えなくなる。

小春日和で日ざしが強くなって地温が高くなると、体長数ミリの小さなくも(コモリグモ科)は、かや、枯れ稲、棒ぐいの先で尻を天に向けて糸を出す。そして熱に耐えられなくなったくもは、上昇気流にのって舞い上がり移動する。

上昇気流が強いと、グライダーのように大空を飛行し、ときにはジェット気流に乗って太平洋を横断することもある。

この空飛ぶ飛行ぐもを「雪迎え」と呼ぶ。抜けるような青空にキラキラ光って流れる

くもの集団移動を見て、農家の人々は農作物の取り入れを急ぎ、雪を迎えるための備えをする。

「雪迎え」の飛んだ日のあとには、きまって雪がやってくるから不思議である。

図1は、雪迎えの飛んだ日の天気図である。東北地方は移動性高気圧に覆われて、おだやかな小春日和である。シベリア大陸には冷たい高気圧が発達している。6日あとの11月22日には、大陸の高気圧が本州付近に張りだし、東北地方でも広い範囲で初雪が降った。

まさに「雪迎え」であった。

年が明けて、早春の暖かい日にも空飛ぶくもが見られる。このくもを「雪送り」と言う。春一番の風に乗って飛行するくもは、なんとも雄大である。

「雪迎え」は昔からあり、古くは「遊糸」という

「糸遊」などと呼ばれた。晩秋や早春のころ、空中にくもの糸が浮遊する現象を指し、古今和歌集にも登場している。

きっと、昔の人もまだ暖かさの残るうちに、来るべき寒さを迎える備えをしたのであろう。

最近では、白竜湖付近でも開発が進み、「雪迎え」を見ることが少なくなったと聞く。

寂しい限りである。こんな美しい日本語

が死語になるとすれば悲しいことだと思う。

## 外国の雪迎え

英語に、小ぐもが引く糸を意味するゴッサマ(gossamer)ということばがある。もともとは、がちょう料理が好んで食べられる晩秋のことを指した。

ロシア語のバービエレートということばは「雪迎え」と「女の夏」の両方の意味をもつ。「女の夏」とは、一説には農婦が厳しい夏の農作業を終えて、晩秋の夏のような暖かい日にゆっくり休みをとるということから、小春日和を指す。「女の夏」が終わると冬が一足飛びにやってくるという、モスクワ便りを読んだことがある。

フランスでは、空のくもの糸を聖母の衣のほつれた糸に見立てて「聖女の糸」と呼んだ。

このような外国のことばからみると、小春日和に「雪迎え」が飛ぶ風景は万国共通である。

## 小春日和の続く年は大雪の兆し

北極から寒気が日本列島に南下してくる現象にはリズムがある。冬は約30日ぐらいの周期で寒波がやってくるという話もよく聞く。

初冬、小春日和が続くと、そのころ北極では、さかんに寒気が蓄積されている。その寒気はやがて日本列島に南下してきて大雪を降らせる。小春日和が長く続くような年は、大雪や寒波襲来に注意する必要がある。

この天気のことわざは、科学的にも十分に信頼できる。この冬は10年ぶりに「冬らしい冬」になるという予報である。寒さと雪への対策も十分にしたいものだと思う。

